

山頭火著作集 III

愚を守る



分け入っても分け入っても青い山—
奥深い山なみとは尽きぬ煩惱の深み
もあろうか。晩年の日記と随筆を取

山頭火著作集 Ⅲ

愚ぐを守る

大山澄太

岡山県に生まる（1899～1994）。逓信省事務官，内閣情報局満州郵政総局嘱託。戦後，個人雑誌「大耕」主宰。愛媛県社会教育委員。愛媛県教育文化賞を受く。俳禅修業40年。「日本の味」「般若心経の話」等，著書多数あり。山頭火の顕彰に努む。

昭和46年6月5日第1刷発行
平成8年6月25日第16刷発行

編 者 大 山 澄 太
発行者 小 島 米 雄
印刷所 埼 京 印 刷

発行所 〒162
東京都新宿区市谷田町 2-31
電話東京(3267) 7181 (代表)
振 替・東 京 4-6 9 1 0 7

株式 潮 文 社
会 社

落丁本・乱丁本はお取りかえします

(越後堂製本)

山頭火著作集 III

愚を守る



分け入っても分け入っても青い山——
奥深い山なみとは尽きぬ煩惱の深みで
もあろうか。晩年の日記と随筆を収録



SBN4-8063-0103-5 C0295 P780E

明文社 定価780円 (本体757円)

山頭火著作集

(三)

愚を守る

大山澄太編

目次

日記

一草庵日記……………11

四国へんろ日記……………57

随筆

寢床……………93

私を語る……………94

漬物の味……………96

水……………97

故郷……………99

独慎……………100

道……………102

三八九居だより……………	104
其中庵まで……………	112
茶の花……………	122
柿……………	123
檜の花……………	125
鉄鉢の句について……………	125
再び鉄鉢の句について……………	127
五十二の春……………	129
春めくころ……………	132
遍路の正月……………	136
片隅の幸福……………	137
白い花……………	139

草と虫とそして……………142

物を大切にする心……………146

無題……………149

述懐……………154

短章

ぐうたら手記……………159

其中庵漫筆……………167

解説……………211

日 記

一草庵日記

八月三日（昭和十五年） 晴

絶食、私は絶食しなければならない。食物がないといふ訳ばかりでなく身心清浄のためにも——せめて今日一日だけでも、すなほに慎ましく正しく暮したいと思ふ。その日その日——その時その時を充実してゆく事が一生を充実することである。

黙々読書、おのれにこもっておのれを観た。疲れると柴茶をすすった。

今日も午後はおこぼれ夕立があった。めっきり涼しくなつて夜明けは肌寒くさへ感じた。

記

八月四日 曇——晴

今日も絶食、すこしよろ／＼する。老いたるかなと苦笑する。空腹をかゝへて出かけた。庵主は旅中のどんぐり庵を訪ねて奥さんより当面の生活費を少々貸して貰った。混合米二升——

八十二錢で買って——提げて帰ることが出来た。あゝ久しぶりの御飯のおいしさ有りがたさ。一粒一粒の光明をひし／＼と味った——先づ仏前に供へて合掌してそして懺悔して——。私は私の健康を呪ふ——私はあまりに健康だ——そして健康でありすぎるための脱線——。

或る友へのたより——

……私は相変らず片隅にちぢこまって有るか無きかの生活をつづけてゐますが、その生活も行き詰って来ました。私はどうでもかうでも一転歩しなければならなくなりました。のるか、そるか。私は全心全身で私の新生活体制を結成しつつあります……。

八月五日 晴——曇

早起。私は自から省みて考へる。——私は節度ある生活をうち建てなければならぬ。ワガママを捨てて規律正しく生きなければならぬ。私はあまりに氣随氣儘だった。私の生活にはムラが有りすぎた。省みて疚しく無い生活、俯仰天地に恥ぢない生活、アトクサレの無い生活——さういふ生活にこそ本当の安心立命がある。

ちよつとポストまで出かける。途上野菜を買ふ。大茄子二つ五錢。大胡瓜一本五錢。大根は高くて買へなかった——一本二十錢といふ。

泰山木。その一枝を活ける。私は泰山木のやうな存在であり度いと希ふ。その葉、その花、何と男性的ではないか。

吹く風はまさしく秋。更始一新のころである。私は醜惡だ——私は寧ろ愚鈍で有り度い。愚に帰り、愚を守り、愚を貫きたい——と思ふ。

一洵老が澄太老に「ドンコ和尚」の尊称を奉った。そして「ドンコ和尚」は一洵老に「ドングリ和尚」の愛称を奉った。成る程ドングリはいゝ。その名を私にくれんかいのと言ったら——お安い御用ぢや。だが山頭火和尚はへう／＼として飛んでは考へ、考へては飛んで行くトンボだ。「ドン」も「トン」もつまり同じこった。「トンボ和尚」の方がいゝぜと言った。かくして三ドン和尚が出来あがつた。私たちはあく迄もトンマでありグドンで有りたいと、何時かさう願ひ合つたこともなつかしいころである。

八月六日 晴

東が白むのを待ちかねて起きる。まもなく護国神社の太鼓が、たうたうたと鳴り出した。だいぶ日が短くなって、もう五時も近からう。

身心沈鬱。それを引き立てるべく丁度映画宮本武蔵の招待券を買ったので出かける。しんみ

り觀賞していろ／＼考へさせられた。——劍は人なり——劍心一路の道はまた私自身の道ではないか。恥ぢる恥ぢる。私には意力がない。あゝ意力がない。

——文は人なり——句は魂なり——魂を磨かないで、どうして句が光らう。句のかがやき——それは魂のかがやき、人の光りである。

考へれば考へる程私は生存に値しないことを痛感する。殊に内外に亘って急迫しつつある現情勢に於ては、非生産的な私にはかく感じないでは居られないのである。

何が私をさう考へさせるか——現代には余裕がない。そして私には自信がない。私は私のやうな乞食者ではあつても、俳諧報国に一念しつゝある者にだけは許されるでもあらう消極的価値さへも失ひつつあるのだ。

私は生きてゐたくないと思ふ。しば／＼死にたいと思ふ。それは生活意力を欠いてゐるからだといつてしまへば其れまでであるが、私の弱性がアルコールの魅力によって自他をごまかしてゐる勢でもある。何といふ弱さ、何といふ果敢なさ、何といふくだらなさだ。

——轉身一路、こゝにのみ今の私の活路がある。しっかりしろ、山頭火。

護国神社の太鼓と共に起床。

いろ／＼活躍する。同時に句も洗ひだした。連日の謹慎はやや沈静にしてくれた。「忍ぶものは救はるべし」おちつけ、おちつけ、落ちついて堪へ忍べ。

銭が無いと——それは多くの場合、ふしだらから来る——心にもない不義理をする。すまない事が多い。今日も電燈料集金員さんに申訳けなかった。すみません、すみません。

タバコがタバコ屋にだいぶ潤沢に出回るやうになった。これだけでも人心が、くつろぐ——世上にゆとりの気分がただよふ。

私は私の胃袋が大きいことを此の頃殊に痛切にあさましく感じないではゐられない、あさましいかな！

よいおしめりが恵まれた。日ましに涼しくなる。日中は夏、そして夜間は秋だ。

けふは珍しく句がたくさん出来た。一日三十句は多すぎるが、めったにないことだ。

過去に執する勿れ、自我を捨てろ、我執放下着。夜酔っぱらひが近づいて呼びかけた。私はじっとして動かなかった。善哉。善哉。其調子其調子！